ビブリア No. 20

発行 いわき市平上荒川字長尾30
福島工業高等専門学校
編集 図書委員会
昭和50年12月5日

福島高専 図書館報

一年生の読んだ本

ビブリア20号は、一年生の読書感想文特集である。文章表現力や思考力を中心に考えると、ビブリアの学生原稿は、どうしても上級生中心になってしまう。しかし、下級生だって自分達の代表の名前を、ビブリア誌上に発見したいに違いない。その秘めたる願望に、いささかなりとも応えてみようとしたのが、今回の試みである。

一年生らしい幼い表現もあれば、大人っぽく背伸びした文章もある。彼等が、今後とも初心を忘れずに、「読む」力を養っていってくれることを願っている。

芋川平一

井上　靖

『天平の甍(いらか)』

1主　高橋潤一

私たちは、現代人としていかに生きるべきであろうか。日本は『富める国』と銘打って発展を続け、先進国といわれるまでになり、人々は、優雅で平和な毎日を送っている。しかし、その中に、現在に至るまでの経過をかえりみる者は、どれだけいるのであろうか。この本を読んだ人は、きっとそう思うにちがいない。

天平の頃、普照、戒融、栄叡、玄朗の四人の僧を乗せた船は、唐へと向かった。彼らは、日本の仏教と文化の興隆につくそうと、唐で出会った業行と共に唐の高僧鑑真の渡日に、力の限りをつくした。しかし、その間には、戒融と玄朗の挫折、栄叡の病による入滅、そして、五度にわたる渡航の失敗という大きな壁があった。しかし、彼らは、そんなことにもめげず努力を重ね、遂には、渡航に成功したのであった。が、その航海で、業行は、遭難死してしまうのであった。彼の半生そのものともいえる莫大な数の経典と共に…。やがて鑑真は、奈良に唐招提寺を建立し、日本の仏教のために、その後半生をささげたのである。

隋や唐に渡り、文化や仏教のためにつくそうとした人々、その中でも、帰国できずじまいの人々や、唐まで着けなかった人々は、何人いたのだろうか。半数に近い人々が、異国や東シナ海の中に消えただろうか。人々は、なぜそれまでしても渡唐しようとしたのだろうか。その答えは、「日本の仏教・文化の興隆のため」にほかならない。そうすることによって日本は進歩するということを信じて、中国大陸へ渡り、修行をし、帰国して世のため、人のために働いたのであった。彼らの心の中は、未来に対する希望と現実に対する苦悶で、はちきれそうになっていたにちがいない。しかし、挫折に追い込まれた、戒融と玄朗の心の中は、違っていたはずである。大した地位も肩書きもなかった二人にとっては、未来も苦悶の色に塗りつぶされていたにちがいない。日本に帰りたいが帰っても仕方がない、そんな心のひずみが彼らを苦しめたのであろう。一方、栄叡の後をついてきた普照は彼の死によって計画の長となり、無事に帰国した。また業行が彼の半生をかけ

て作った膨大な数の経典の類は，彼が帰国する船の難波によって彼もろとも海のもくずとなってしまう。ここに，私は，人間の生の哀しさ，また，興味深さが非常に大きく打ち出されていると思う。それは，一体何をいわんとしているのであろうか。人命なんてもろいものだ。人間はその命を与えられて，あるひとつのことをしようとする。しかし，そのことをやりとげたにしろ，やりとげられなかったにしろ，やろうとする心構えが必要なのである。あとは「汝が性（さが）のつたなきを泣け」でどうしようもないのである。

現代の生活や文化において，天平の頃の影響は少なくない。つまり，私たちの身のまわりには，血と汗にまみれた遣唐使の歴史が刻みこまれているのだ。それを考えることは，自分に明日への活力を与えてくれる。名も知らない人々が，日本のためにと努力している。私も名は世に出なくとも，母国のためにすばらしいエンジニアになるために頑張りたいのである。

「天平の甍」は，私に大きな影響を与えた。私はそのいくつかの影響をひとつひとつかみしめて，普照たちに負けない人となりたい。

武者小路　実篤

『馬　鹿　一』

1土　岡田一也

武者小路実篤の書いた「馬鹿一」は山谷五兵衛の話しで始まる。山谷はこの物語の語り手であり，またこっけいさもいっしょに運んでくる。彼は，物語に登場する人々の家をかってな時に訪問して歩く閑人であり，物語を自分つまり作者のところへ話しにくる。この本は山谷の話をつづったものである。

馬鹿一は，自然を愛し，自然からも愛されている。彼は，どのような物事からでも美しさを見いだせる男なのだ。彼に言わせれば，道ばたの草も石も美しい。そして彼は，その美しさを絵にする詩にする。そんな大きな心を持っている。

さて，友達は，馬鹿一に対してどのような感情を持っているだろうか。馬鹿一などと言われているのであるから尊敬されていない。馬鹿にされている。「あいつは，社会に出ても通用しない。」と思われている。「彼は，石ころや草やじゃがいもばかり書いているじゃないか。彼は，人に認められていないじゃないか」と少しばかりの優越感にひたっている。そのくせ馬鹿一のような気持ちになりたいと思っている。

だから，自分達のゆがんでいる心を満足させようと，馬鹿一に，「自分は馬鹿で，とりえのない人間だ。」ということを認めさせようとするのである。

馬鹿一という人間は，愚かだ，馬鹿だと言われながらも，自然を愛し，自分の心にさからうことなく，自分のやりたいこと，やるべきことを，遺憾なくやりとげて，大往生をしたいという考えを持っている。ここに魅力がある。

作者は，馬鹿一を理想の人物として描いているので，周囲の人々も，このような生き方に協力させようとしている。そのため，山谷，真理先生，白雲子泰山，等の人々は今の世の中の人々より，一歩作者の理想に近づいている。つまり，どの人をとっても少々できすぎているのだ。だから馬鹿一も純粋な気持をいつまでも持ちつづけることができたのである。また，自分の心を貫いて生きられたと思う。

もし，一人でも，悪い人物がでてきたとしたら，一直線の考えしか持てない馬鹿一は死を選ぶしかないだろう。

また，小説の中では，豊かな者と，貧しい者とを対比して書き表わしている。そして何が幸せで，何が不幸せか，ということを語っている。豊かな者が幸せで貧しい者が不幸せか。

しかし，小説の中では，すべての人間が最後には世間に認められることになる。

自分は，馬鹿一のすべてが良いとは思わない。というのは，馬鹿一は，あまりにも純粋すぎる。純粋なのはいい。しかし，彼はあまりに，馬鹿げている。純粋でも，一方からしか物事を見ることができないのではこまる。つまり，時には疑うことも必要だと言いたいわけである。物事をあらゆる方向から見つめ，もっと柔軟な考え方を持つことも必要であると思う。どうだろう。

自分は，馬鹿一という題名に引かれて読んだ。馬鹿一の生き方は，世間の常識では，あまり利口ではない。しかし，一見おかしく思われる言動の中にも純粋さでは，太刀打ちできないと思わせるものを持っている。ともあれ，彼が偉大であることにはちがいがない。

自分は，馬鹿一，その他の真理先生などを小説の中だけの人物だと思う。自分には馬鹿一のような生き方は出来ないし，しようとも思わない。この世の中が彼のような人間でいっぱいになることもないだろう。しかし，馬鹿一のような人がいて，その純粋さによって，すこしでも住みよい社会ができたら大へんすばらしいと思うし，そのような社会にしてゆきたい。

遠藤周作

『おバカさん』

1C 渡部良重

私は，作家遠藤周作氏の小説の愛読者です。「おバカさん」は，私が読んだ同氏の小説の中では，最高の傑作であると思う。

遠藤氏の小説に登場する主人公達は，皆一つの型にはまっている。弱虫で，そのくせ冷たく根本的に愛の欠けた人物。この主人公達の中に現在の大部分の人間（というと反感を覚える人もあるでしょうが）の姿をみるようで親しみを感じる。他の小説家が書いている欠点のない完全な人間ではつまらない。欠点があるからそこに生きた人間性があらわれるのである。「おバカさん」の主人公ガストンは，どんな小さなことにもおびえてしまう臆病な人間であることは事実だが，けしてその恐怖に打ち負かされることはない。彼は人を愛するあまり，危険を顧みずその恐怖をも忘れ，手を差しのべて人々を助けようとする。救おうとしている殺し屋の遠藤（作者ではなく登場人物）にひどいめにあわされたあとでさえ，恐ろしくてたまらないくせにのこのこ彼について行く。

これが彼の強さであり，愛でもある。人々を無気力と道徳に対しての無感覚から救う唯一の手立ては，愛，無償の愛である。もし彼らがあたたかく見守られ愛されていることを知ったなら，彼らもまた恐怖を克服し他人を愛するようになるであろう。ガストンの捨身の愛の影響は，殺し屋の遠藤にまで及んだ。兄を殺した男に復讐するという決心は徐々にぐらついてゆき，敵を討つ絶好の機会であったにもかかわらず，ついに引き金を引くことができなかった。

又隆盛（登場人物）は，平凡なサラリーマンで小さな平凡な幸せを追い求めることだけに浸りきっていた。しかし彼もまた，ガストンのあまりにも純粋な姿に魅了されていく。純粋に他人を愛し，純粋にどんな人をも信じ，だまされても裏切られても，その信頼や愛情の灯を守り続けていく人間は，今の世の中ではバカにみえるかもしれない。だが彼は馬鹿ではない。ほほえみながら「おバカさん」といいたくなる人なのである。確かに彼は，現代の私達とはかけ離れた存在である。しかしこの小説を読んでいると，社会に対して矛盾を感じていながら自分達の狭い世界にとじこもっているみじめな自分の姿を忘れ，大きくて力強い何かにあたたかく見守られているような，何とも言い表しようのない不思議な気持になっていった。

遠藤氏は，この小説の中でガストンにキリスト像を浮かばせている。穴倉のような所からあらわれ，空の彼方へ消えてしまったガストン。何となく神秘的なものを漂よわせている。読み進むにつれて主人公のおバカさんに魅了されてゆくのを実感として味わった。

この小説は，随所に挿入されているユーモアやこっけいな場面が鋭い風刺に衣をきせ，その皮肉をものやわらかな調子の中にひそみこませ，話全体をごく自然に流している。又私が今までに読んだ小説には見いだせなかったような不思議な響きと後味があった。そして何度繰りかえして読んでみても，はじめの新鮮さを少しも失なわなかった。この本に限らず遠藤氏の書いた小説には，読み進むにつれてだんだんひきこまれていくような不思議な魔力がある。今だにその原因は，私にもわからない。

私は，作家遠藤周作氏が好きである。ぐうたら何々というのも過去に何冊か読んだことがある。この種の本は，ただ単におなかをかかえて笑うだけのものであった。絵こそはないけれども漫画と同じようなものにすぎないと思い，少しおとなになったつもりで難しい「海と毒薬」などというもの読んでみたが，読んでいて楽しいと思える本からはほど遠く，恐怖を感ずるような本であった。江戸川乱歩の怪奇小説とは異なるが何かせまってくるようなこわさがあった。そこへいくとこの「おバカさん」という本は，ユーモア的な面と私達現代の若い者に何か足らないものを問いかけているような，問題小説的な面をも兼ね備えている。

私のこの文章だけでどれだけこの小説の魅力を引きだすことができるか不安である。できれば多くの人達にこの本を読んでいただきたいと思う。この本のよさは，読んでみたものでなければわからないと思うから。

三浦綾子

『塩狩峠』 キリスト教というもの

1C 渡辺孝道

まだ私が幼かった頃，私の小学校にキリスト教の伝導師が来て，イエスーキリストについての話をしてくれたことを覚えている。しかし，その当時はキリスト教に大きな反感を持っていた。それは，キリスト教が，外国（西欧直輸入）の宗教であること，自己犠牲が強いこと，家が曹洞宗であったことなどが主な理由であった。しかし，それは私のあやまりであったことを知った。

この本には，明治十年から二十余年間あまりの話が載っていた。つまり，主人公である信夫が生まれてか

ら死ぬまでの話である。この話は，実際に起こった話で長野政雄さんという人が手本である。

この本の柱は，宗教に引かれていく信夫の様子と生者必滅会者定離の普遍定理であるように思われた。そのことは，次のことから読みとれた。母と妹の出現，吉川とふじ子との出合いと別れ，伊木一馬の伝導している様子。祖母・父の突然の死，ふじ子を残し多くの人々の命を助けるための信夫の死である。以上のことを順に話していくことにする。

信夫が宗教に引れていったのは次の経路であった。祖母トセの死によって別居していた実母が，実の妹を連れて帰ってきて，彼女らを父がヤソ(キリスト教徒)であると知ったこと，父の死によって死に対する感覚を持ったこと，ある出来事で吉川と知り合いその妹ふじ子に恋をし彼女もヤソであったこと。ここで一言ふじ子という小女について述べるが，その小女は幼いころからびっこで，十七・八才のころからその病気がひどくなり寝たきりの女性となってしまった。しかし信夫の誠意と愛情によって回復にむかった。話をもどすが，彼はふじ子と知り合ったのちに，伝導師伊木一馬と知り合い対話をすることによりすべてを投げ捨てて信仰に入っていった。旭川の教会，駅員の寮で結成した旭川鉄道キリスト教青年会聖書研究会での説教がその直接の現われである。私も現在キリスト教に関心を持っている一人となった。私の場合は，この話のように複雑ではないがある程度の共通点はあるように思う。死に対する気持ちと神という存在を信ずるという点である。

死という言葉がでてきたのでこの本での死の場面を再現してみたい。まず，祖母トセの死であるが，信夫が妹待子と通りであったことを話し，そのことをトセに話したためにトセが怒り，そのために脳卒中で死んでしまったのである。次に父であるが，父は朝，人力車に乗って出勤の途中で倒れその日のうちに死んでしまったのである。最後に前の段でも述べた通り，客車の乗客を救うために自分自身のからだを線路に横たえて客車を止めたこと，以上の三つである。この三つの共通点は突然に人が死んでしまい，あとに残されてしまった人が悲しむという点であったように思われる。ここでは劇的な死を遂げた信夫の行動について述べる。信夫は東京から北海道へカリエスと肺病に苦しんでいる最愛の女性ふじ子に会いに来た。そして，結婚を約束したのであるが，ふじ子は同意しなかった。しかし，信夫の愛情が通じたのか，彼女は立って歩けるようになるまで回復しついにそれに同意した。だが，命運つきたのか，結納を納める当日に列車事故によってついに結納を届けることができずに死んでいった。なぜ，このような時に生者必滅会者定離の定理が成り立ったのであろうか。この場面は本当に残酷であった。そして，当日ふじ子はその知らせを聞いて呆然として倒れてしまった。

信夫のキリスト教式葬儀を終えて数日後，彼女は彼女の兄であると同時に信夫と無二の親友であった吉川に連れられて事故現場に行きそこで泣き伏してしまった。これで話に終止符が打ってあった。私は，ふじ子にとってこれが最高の幸福であり，本当の意味での幸福のように思われる。なぜなら，当時彼女のように重い病にかかっている人を平気で尋ねて来て，笑ったりできる人間は少ない。ましてや結婚してくれと頼む人はいない。むしろ，自分可愛さのあまり寄りつかないのが普通の人の考えだと思う。つまり，ふじ子にとって信夫という人間を知り，その人物に感謝でき，愛されたということだけでも大きな幸せであり，真の幸福だと私は思う。以上のことは，次の言葉そのものである。『一粒の麦　地に落ちて死なずんば　唯一つにてあらん　もし死なば　多くの果を結ぶべし』（新約聖書　ヨハネ伝　第十二章　二十四節）

最後にこの感想文の主題である，自分自身についてのキリスト教とはなにかということであるが，私自身はっきりとキリスト教なるものをつかんでいない。ただ，先輩の人から聞いた話しによって「自己犠牲」の強い宗教であるように思った。そのことはこの本からも読みとれることである。この点においてキリスト教はすばらしい宗教であると思う。そして，これからも，もっといろいろ知ると思うが，この文章の始めに述べた，私のあやまりであったというのは，キリスト教の自己犠牲を知ろうともせずただ反感を持っていたということである。

永　六輔・崎南海子編

『追伸・七円の唄』

1E　郷田道弘

本にもいろいろの種類がある。あまり本など読まない私にはこの文を書くために一つの本を選び出すのに苦労した。読む本というと中学の時は戦記物，最近になっては数さえも少なく，たまに見つけた詩集を買って読むぐらいである。結局はこの七円の唄が頭にひらめいた。さして文学的でもなく，一般の人があるラジオ番組に投稿した詩を集めたものであるが，それがなんともほのぼのとして，最近読んだ本の中では最も私を感動させてくれたのである。文学界に名の通った作家が書いた小説よりも，ずっと心のこもった本に思えたのである。それに，永六輔と崎南海子が編集者であることもちょっぴり気に入っていた。

はじめに書いたようにあまりにも素人っぽさが感じられる。例えば，こんな風である。

もう
冬になりそうだから
ぽかぽかあたたかいあなたが
ちょうどいい

器用につまんだタバコ
その
おおきな背によりかかり
ときおりやってくる
陽だまりの中で
わたしは
ほんの少し
淋しくなったりして……

この本を読んでいるとつい微笑んでしまうのである。いつもそういうことをしていながら，その詩を読んだときにはじめてそんな出来事に気がついたようで，思わず本をおいて溜息をついてみたり，母親と子あるいは恋人同志など，その愛情がありありと描き出されているものに深い感動が沸いてきたり。読んでいるうちに不思議に深く吸い込まれてしまうのである。その一編ごとに作者と同じ夢の中で陶酔してしまうのである。

あと二十ページぐらいというところまでくると，何となくこの本に書かれていたものが，もうすでにこの本の第一ページを開いたときにわかっていたような気がしてたまらなくなった。それというのも，私はこの本の一ページ目を開いてふとこの本の香りを嗅いでみた。それはどの本とも変らない普通のパルプの香りであるはずなのに，その時は何とも不思議な香りで甘い匂いだったのだ。永六輔という名前と好きな詩集ということでそんな感覚を覚えたのかもしれないが，ただほのぼのとした何とも言えない気がしたのは確かなのである。

ずっと読んでいて目についたのが一編ある。とっても短いのに，とってもわかるのである。作者の淋しさが自分にも前にいつかあったような気がするのである。考えてみると自分も同じように淋しいとき憂うつなときふと街の中を歩いてみたりする，そんなときの気持ちによく似ているのである。

吹きだまりの
紙くずや
すいがらや
マッチ箱や……
僕の小さな心も
おちていそうな
気がして
立ちどまった

書かれている一編々々の詩には題などなく，ただ共通しているのが日ごとの生活のちょっとした感動，愛，夢，会話をそのまま素人の手で書かれているということだけなのであり，そこがまた私の心にぴったりと合うのである。詩の好きな私にとって，感動的な本と言えそうな七円の唄は，こんな本もあるんだなあって，それだけかもしれないけれど，みんなに読んでみて欲しい本なのです。

そして七円の唄から得たものの一つには，この詩があるのです。

独りぼっちは淋しくて
あてもないのに手紙を書き
独りぼっちを封筒につめて
宛て名も書かずに
ポストに入れました。
けれど　この秋に
淋しさは
風といっしょに
戻って来てしまいました……

——みちひろ——

石野径一郎

『ひめゆりの塔』

1M　近内末男

戦争。なんと冷たいひびきのすることばだろう。

この本は，私に戦争のみにくさを教えてくれた。そして，今までにそんなに深く考えたこともなかった戦争という悲劇について，もう一度，私にいろいろなことを考えさせずにはいなかった。この本を読み進めていくうちに，私はいつとなくこの本のとりこにされ，知らず知らずのうちに，この本の中の主人公達といっしょになって，悲しんだり喜んだりしている自分に驚かずにはいられなかった。そして沖縄出身の作者の戦争への怒りと平和への祈りが，小説の世界を超えて伝わってくるのだった。

この本を読むまで，私は戦争というのはもっと格好のいいものだと思っていた。けれども，常識で考えてもわかるように，そんな格好のいい戦争などあるわけがない，なのになぜ，それに気がつかなかったのだろう。私は思う。それはたぶん戦争の表側ばかり見ていたからではないかと。

戦争はみにくい，そして悲惨だ。この戦争の犠牲になって死んだ人々は，死んでも死にきれなかったので

はなかろうか。なんのためにこんなめにあわなければならないのか。なんのために死ななければならないのか。彼らは1人1人いろいろな疑問と、戦争への怒りをいだいて死んでいったにちがいない。

この小説は，太平洋戦争末期，死闘をくり返す沖縄で結成された学徒特志看護婦隊「ひめゆり部隊」の乙女達の大半が，死の行進の果てに米須の洞窟で爆死するまでの闘いを描いたものである。

ところで病院が移動する時，重傷患者はどうなるか知っているであろうか。そう，おいてけぼりなのである。青酸カリを渡されてあとに残されるのが，重傷患者の運命だった。動けないのだからしかたがないといえばそれまでだが，まだ生きている人間を，手あてさえすれば助かる人間を，先々の予定とか，あしでまといになるとか，彼たちの都合のいいように命をうばう。そんなことがゆるされていいものだろうか。いや，ちがう。人間の命は尊いものなのだ。命あるかぎり，それを無理に縮めることはゆるされるものではない。もうすこしなんとかならないものかと 私はくやしさと，いらだたしさを覚えずにはいられなかった。好きでこんな体になったわけでもないのに，役に立たなくなったら死んでもらう，そんなばかげたことがあっていいはずがないのだ。

沖縄では，この戦争によって　当時の全県人口の3分の1、15万人から17万人と友軍の将兵9万人が尊い命をすてたという。現在では，沖縄は海洋博などでにぎわいめざましい発展をとげ，活気をみなぎらせているが，その反面，1家全滅の例も少なくなく，沖縄百万の県民は恐らく1人として「遺族」でないものはないといわれている。

私達は戦争などという過ちを二度とおかしてはいけないと，あらためて決意しなければならないだろう。戦争とは何か，そして戦争についてのあらゆるみにくさを悲劇を，世界中の人々がもう1度よく考えてみるべきである。そして戦争を絶対おこさなくてすむような方法を考えてほしいものだ。私は思う，そんな何かが，きっとあるように———。

トルストイ

『人は何で生きるか』

1E　小川広幸

まず，この本の感想文を書くにあたって記しておくことがある。

というのは，非常にこの本の題である「人は何で生きるか，に魅かれたということである。なぜ魅かれたかというと」今日までにもいろいろな形で，「人は何で生きるか」ということが盛んに論じ合われてきているというようなことで，自分なりにこの問題に終止符を打ってみようじゃないかと，考えをまとめてみようと思ったからである。

このようなことを書くと妙に理屈っぽく聞こえるかも知れないけれど，こういうことは，意外な時間つぶしとなるものだ。また，こういうことを暇な時に真剣になって考えるのが自分に合っているせいか好きだ。

しかし，例によって答は出ない。この問題はあまり大き過ぎる。

いろいろな人のこの問題に対する結論は，うなずかせるものがあるが，何か物足りないという感じがする。それも一理あるが，また別の自分の要望を満たしてくれるものがあるという気がする。

以上のような訳で，かの文学史にさん然と輝く巨匠であるトルストイの答を問いただしてみようとページを開いた次第である。

トルストイと言えば，自分の乏しい予備知識では，難しい顔に未来を見ているような鋭い目，自分には到底わかりようのないことを口走っているイメージが強いような気がする。

百科事典で調べてみる。

トルストイ（1828～1910）ロシアの作家，思想家。「戦争と平和」「アンナ＝カレーニナ」など。

当然わからない語が出てくることを覚悟して文に振り回されぬよう慎重に一字ずつ読んでいく。

最初から「人は何で生きるか」と題し，聖書を引用し「人は何で生きるか」をただしている。この聖書の文のはっきりとした意味というものはつかめなかった。が，神は愛なり……ということばに代表されるように「愛」ということにつきるようである。

さらに本文全体は童話風にまとめられている。初めは論文地味た文だと思っていた自分は表現上の広さに改めてトルストイは本当に素晴しい作家であると痛感した。

次の章は天使が神に申し渡された三つのことばを悟っていくという物語であるが，やはり天使の悟ったことは，すべての人は自分のことばかり思う心でなく愛によって生きているのだということであった。

さらに次の章も，神が自分の所に赴いてくるという愛をもって迎えたという話である。その愛を持って接した人が，皆神であったということである。

まさに題名のごとく「愛のある所に神が在る」と言った感じだ。

この章では，人生のすべてである愛で人に接することが大切であり人は皆神であるということを説いたようだ。

まさしく人生というのは，愛の連続に違いない。

人は愛で生きる。

これこそ，自分に与えられた最良の答えではないかと思う。しかし，今日の人の心は，乾いた心へと変化しつつあるのが実際ではないだろうか。

私たちは，愛を持って人々と接し，さらに生活を営まなければならないのではないかということを悟ったことがこの本を読んでの収穫である。

芥川龍之介

『山　鴫』

1M　郡司康弘

最初，この「山鴫」を読んで感じたことは，こんな作品が，芥川にあったのかということである。今までだいぶ芥川の作品を読んだが，芥川の作品といえば，全体的に暗く空想的で，読んでいるうちに心の中が暗さでいっぱいになり，だんだんその作品の中に，ひきずりこまれていく，そんな感じがいつもしていた。特に，「羅生門」，「尾生の信」，「魔術」などの作品はそうだ。

しかし，この「山鴫」は違う。まったく違うのである。作品全体が明るく，暗さ，恐ろしさとか空想的なところが，これっぽちもなく，まさに「現代的」という言葉が，ぴったりくるような作品だと思える。

そういう感じがするのは，他の作品との題材の違いすなわち，この作品が，知らない人はいないくらい有名な，文豪トルストイとトゥルゲネフのふたりを主人公にして，そのふたりの交遊を描いていることによるのであろうか。

なぜ感想文を書くのに，この「山鴫」という作品を選んだか。作品の出来がすばらしく，深く感動した……からではない。この作品を読んだ後，何となく他の作品よりも，すっと心に残ったからだ。どうしてかとまた考えてみると，1つは，やはり，世界の偉大な作家，トルストイ，トゥルゲネフが感じさせる重みである。もう1つは，前にも言ったように，ぼくが思うには，この作品が，あまり出来の良い作品ではないような気がするということによる。しかし，それがかえって，あそこはこうしたらいいんじゃないか，ああしたらいいんじゃないかと，より深く考えさせられたからである。

そこで，考えさせられて心に残ったことをこの感想文に，全部，はきだしてしまいたいと思う。

まず，この小説の主題についての考えを，明らかにしておきたい。自分なりに考えて見ると，徹頭徹尾他人の中に，真実を認めない，他人のすることに虚偽を感ずる人間としてのトルストイを，まったく対照的な性格のトゥルゲネフとの対比において描き出そうとしているのだと思う。つまり，この対照的な個性をふたりの交遊を通して，浮き彫りにし，最後にこのふたりの個性に，和解が成立するというのが，この作品の主題だろう。

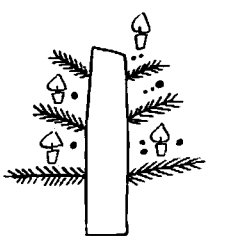
ぼくの好きなところ，あまり気に入らないところをちょっと並べてみたい。

好きなところは，まず最初に，山鴫を取りに行く3人の会話である。作者は，この会話の中に，トルストイの性格を出そうとして，ちょっとどぎつい皮肉をいれている。普通なら，相手のトゥルゲネフが怒って，喧嘩になってしまうだろう。ところが，この作品の主題は，このふたりの和解にあるのだから，ここで喧嘩をされては，あとに話が続かない。そこで，トルストイ夫人が出てくる。彼女のたびたびの仲裁のおかげで話がスムーズに続いて，またそれでいて，トルストイの個性が十分に出ている。芥川の技法のうまさを，本当によく感じさせられるところである。

もう1つは，時々作者は，トゥルゲネフと呼ぶかわりに，「父と子と」の作家，などと呼ぶときがあることである。ぼくは，このたびに；このような名作を書いた人が，ふたりも出てくるんだなあと，改めてこの作品の奥行きの広さを感ぜずにはいられなかった。

しかし，気に入らないところが，ひとつある。それは，最後の締めくくりである。ある名言辞典に，こんなトルストイの言葉があった。「自分の欠点を，すべてよく知っている人だけが，他人の欠点に対しても正しく振舞えるのである。」前にかえって，この言葉の意味からすると，トルストイは，自分の性格，それに相手の性格は知りすぎるほど知っていたのだと思う。それで最後には，和解が成立した。しかし，この和解には，トルストイの，もうどうしようもないという気持があったにちがいない。つまり，この和解は，真の和解ではなかったということになる。この作品の主題が和解ということにある以上，この作品は，出来が良いなどとは，やはりお世辞にも言えない。しかし，このふたりの対照的な性格が，どこかでひとつに和解するところが必ずあると思う。

内容が明るく，奥行が深い，こんなすばらしい小説のクライマックスが，どうかそんな和解であって欲しかったと思う。



かんじがわるいはなし ――― あとがき ―――

国語科　池　田　　豊

○作年は炭色の時代だった　○高等専間学校の体育体会で活役した　○一諸に苦しみに絶えて休力作りを初める　○私くしは運動神径は全々だめ　○親卞で夏体みを向かえる　○弧独の中で生長した　○今だに顔を会わせない　○盤越東線の純行の気車は弁が悪い　○後半ごはんを飯く　○新ためて皆に進めた　○絶対標価は親頼できる　○青葉僚の一周間も後わった　○磐悌山の盾板が皃につく　○徒のつながり　○追力がある　○西も東しも　○反々だった　○先面器　○発期する　○化装行列　○専門等のへや

中学をかなりの成績で終え、入学試験に通って、あっぱれ国立高専に入学したはずの人だちの中で約80人。これら秀才が近ごろに書いた作文から拾って、特にひどい誤りを組み合わせると、このようになる。

「漢字などは自分の名まえが書ければ、それでたくさん。」と放言したのは、大昔のシナの悲劇的英雄、項羽であったとか。

しかしながら優秀な技術者として、精密堅固な論理的思考に耐えてゆかねばならぬ諸君、上のていどの日常語は、せめて正しく書き現わす力を、ぜひとも養っていってくれたまえ　これは、高尚な専門科目のはるか以前の問題だと思うのだが。

☆お知らせ☆

近頃は、文庫本ブームで、小説類だけでなく時には高度な学術書も、たやすく入手できるようになったことは、歓迎すべきことである。しかし図書館にとって頭の痛いことは、何しろ軽装のため破損しやすく紛失しやすいことである。

最近幸いなことに、岩波文庫や角川文庫で、図書館向きの厚表紙シリーズを出してくれたので、本校図書館でも早速購入することになった。内容は小説が中心であるが、学生諸君に大いに利用してもらいたいと思っている。〔岩波版ほるぷ図書館文庫＝全 123冊，角川文庫ホームライブラリー＝ 100選〕

なお、分類の都合で、図書目録（およびカード）に記載されていないものに、岩波新書・中公新書・現代新書などがある（尤も、その一部分は図書目録に載っている）が、これらの本も活用して欲しいと思っている。

ともかく気楽に本とつき合うこと、これが誤字・アテ字・珍妙な日本語をなくす第一歩である。「ことば」の乱れは、「こころ」の乱れの現われである。

新着図書目録

＊印は図書館他は各教官の研究室に所在するものを分類別受入順に記載した。

総　記

朝日新聞縮版
朝日新聞縮刷版　50－6　朝日新聞社＊
同　50－7　同＊
同　50－8　同＊
同　50－9　同＊
世界の名著5　トマス　アクィナス
同　10　ショーペンハウエア
中央公論社＊
東洋文庫　273　木綿衣　鈴懸衣　踏雲録事
274　山東民話集　平凡社＊
275　中国革命の階級対立　(2)　同＊
277　中国訪問使節日記　同＊
278　元曲五種　同＊
同＊
満文大系14　富山房
日本教育全集11　角川書店＊
福田恒存　新聞のすべて　日本の将来　高木書房＊
東京大学公開講座　東京大学出版会＊
同　3　技術革新　同＊
同　4　生命　同＊
同　5　宇宙　同＊
同　15　海　同＊
同　16　空　同＊
同　19　エネルギー　同＊
続群書類従　第1輯下，2輯下，11輯上，17輯下，25輯上，28輯上，33輯上，補遺3，
続群書類従完成会＊
日本新聞年鑑　1975　年　電　通
本居宣長全集20　筑摩書房
紀田順一郎
現代読書の技術　柏書房＊
いわき地方史研究会編
いわきの歴史　マルトモ書店
万有百科大辞典13　生活　小学館＊
Encyclopeadia Britannica 1－19, I－X,
Guide to the Britannica
Encyclopeadia
Britannica＊

哲　学

高取正男　仏教土着（2冊）　日本放送出版協会＊
田村芳朗　日蓮　殉教の如来使　同
笠原一男　転換期の宗教　同＊
紀野一義　遍歴放浪の世界　同＊
村山　修　比叡山　同＊
金谷　治　論語の世界　同＊
エミノヤ，ラサール
禅とキリスト　春秋社＊
H・デュモリン
仏教とキリスト教との邂逅　同＊
Xレオン，デュフール編
聖書思想事典　三省堂＊
アジア仏教史　佼成出版＊
日本編1　飛鳥　奈良仏教　同＊
同　2　平安仏教　同＊
同　3　鎌倉仏教（3冊）　同＊
同　4　室町仏教　同＊
同　5　江戸仏教　同＊
同　6　近代仏教　同＊
インド編　古代インドの宗教　同＊
同　2　原始仏教と部派仏教　同＊
同　3　大乗仏教　同＊
同　4　密教　同＊
同　5　インドの諸宗教　同＊
6　東南アジアの仏教　同＊
中国編1　漢民族の仏教　同＊
2　現代中国の諸宗教　同＊
懸田克躬・共訳
フロイト著作集7　人文書院＊
伊藤清司・編
シンポジウム日本の神話5)　学生社＊
日本思想大系
28　藤原惺窩　林羅山　岩波書店
35　新井　白石　同
近代日本思想大系
5　三宅雪嶺集　筑摩書房＊
10　木下尚江集　同＊
14　柳田国男集　同＊
22　折口信夫集　同＊
講座　仏教思想
1　存在論　時間論　同＊
2　認識論　論理学　同＊
3　論理学　教育学　同＊
4　人間学　心理学　同＊
6　人生観　同＊
エドウ・アルト・ベルンシュタイン
7　社会主義の諸前提
と社会民主主義の任務　ダイヤモンド社＊
ロベルトミルス
8　政党政治の社会学　同＊
ガエタノーモスカ
9　支配する階級　同＊
GDHコール
10　社会主義とファシズム　同＊

歴　史

岩波講座日本歴史
1　原始および古代1)　岩波書店
5　中世1)　同
9　近世1)　同
14　近代1)　同
18　近代5)　同
日本の歴史
19　元禄時代　小学館＊
20　幕藩制の転換　同＊
21　町人　同＊
朝日新聞に見る日本のゆみ
思折のデモクラシー　朝日新聞社＊
飯塚浩二著作集
3　ヨーロッパ対非ヨーロッパ　平凡社
北緯79度
8　世界と我が国土　同
いわき市　平，内郷，常磐地区住宅地図　日興出版＊
和訳日本正史　索書　浅古書院
同　南斎書　同
図説　日本の歴史
9　天下統一　集英社＊
11　江戸の繁華　同
芸能史研究会編
日本庶民文化史料集成4)　三一書房＊
松本清張　日本史探訪7　角川書店＊
高柳光寿他編
角川日本史辞典　第2版　同＊
堀米庸三編
中世の秋の中で　河出書房＊
海音寺潮五郎
日本史探訪　第13－14集　角川書店＊
筑波常治　米食　食肉の文明　日本放送出版協会＊
井上秀雄　古代朝鮮　同＊
宇田道隆　科学者　寺田寅彦　同＊
伊藤光晴　問われる戦後　平凡社＊
柳田国男と歴史学　日本放送出版協会＊
日本的生活の母胎　河出出版＊
山田宗睦　ドキメント昭和史7　安保と高度成長
平凡社＊

社会科学

堀内　守　教育者　日本放送出版協会＊
吉田耕他　現代女性の意識と生活　河出出版＊
倉林正次　祭の構造　同＊
世良正利　日本人の心　日本放送出版協会＊
我妻洋他　偏見の構造　同＊
糸賀一雄　福祉の思想　同＊
橋本時雄　宗教以前　同＊
松原治郎　核家族時代　同＊
増田光吉　アメリカの家族　日本の家族　同＊
湯沢雍彦　図説　家族問題　同＊

藤岡喜愛　イメージと人間　同 ＊

堀内　守　教育思想の歴史　同 ＊

童貞公害と行政　1975年版　過疎技術資料調査会

山田宗睦　道の思想史　上，下　講談社

繁田千治編
日本右翼の動向と現勢　公安資料協会＊

昭和50年版　教育行政の現状　教育行政資料調査会

Jゴットマン他
変動する大都市　都市スプロールの展望　鹿島出版会

スコットグリア
現代都市の危機と創造　同

LFシノア共編
都市調査と政策計画　同

クラブジヤンムーラン編
広域行政　同

Gショウバーク
前産業型都市　同

池田青長　地域開発政策　同

WRトンプソン
都市経済学序説　鹿島出版会

LHクラッセン
地域再開発　同

Mマイヤーソン編
脱都市時代　同

マーチン・アンダーソン編
都市再開発政策　同

JBカリングワース共編
地域計画と都市計画　同

HSバーロフ編
人間環境都市　同

WHホワイト
都市とオープンスペース　同

池田　爽　統計調査のコンピュータ解析　東洋経済新報社

Barbara Teri Okada他
Dos and Doнt for the Bnsinessman abroad　Regents

高取正男
民俗のこころ　朝日新聞社＊

自然科学

Compbe　化学のシステム2　化学結合と化学平衡
同　4　構造物性と巨大分子　丸善＊

吉沢康和　元素とはなにか　講談社＊

坂東祐司　種の絶滅と進化　同＊

Cランツオン
数とはなにか　同＊

小林義雄　菌類の世界　同＊

湯浅光朝　宇宙の探究　日本放送協会＊

北野　康　水の科学　日本放送協会＊

太田次郎　アメーバ　同＊

加地正郎　ウィルス病の世界　同＊

小堀　巽　沙漠　同＊

小尾信弥　宇宙の科学　同＊

小口　高　宇宙空間の科学　同＊

金原寿郎編
基礎物理学　上，下　養賢堂

小平邦彦　Collected Works 1−3(2組)　岩波書店

日本化学技術史大系18　機械技術　第一法規

原島　鮮　改稿　物理学　下　学術図書

竹林松二　一般化学（2冊）　同

科学技術庁資源調査会編
三訂　日本食品標準成分表　大蔵省印刷局

河口武夫　増補版　半導体の化学　丸善

M.L. McGrasho
SI単位と物理，化学量　化学同人＊

川村信一郎
化学研究調査と文献　南江堂＊

鶴田敦他　化学者　樋田鶴太郎の意見　化学同人＊

河田龍夫　数理解析とその周辺 fourier 解析　産業図書

J.A.Compbell
化学のシステム1　エネルギー　原子分子
同　3　化学反応と熱力学　丸善＊

日本分析化学会編
分析化学大系　錯形成反応　同＊

川村信一郎
化学調査と文献　南江堂＊

千谷利三　新版　無機物理化学　上，下　産業図書＊

日本化学会訳編
生物圏資源の利用と保全　丸善＊
海洋汚染とモニタリング　同＊
環境と疾病　同＊
微量元素　同＊

Aハンフリー
生物化学工学　東京大学出版会＊

高橋信孝　生理活性天然物化学　同＊

友田好文　海洋学講座4　海洋物理　同＊

堀部純男　同　6　海洋無機化学　同＊

堀部明彦　同　7　海洋生化学　同＊

丸茂隆三　同　10　海洋プランクトン　同＊

多賀信夫　同　11　海洋微生物　同＊

微生物生態研究会編
微生物の生態2　相互作用をめぐって　同＊

長谷川武治
微生物の分類と同定　同＊

村橋俊介他編
合成高分子　2−3　朝倉書店＊

井本稔他　高分子化学概説（2冊）　同＊

浅原照三　有機化学反応における溶媒効果　産業図書＊

ウェズレイ・ウェンドランド
熱的分析法　同＊

寺山宏他　改訂新版　生物物理化学の基礎　朝倉書店＊

富田彰他　朝倉講座16　固体化学　1−2　同＊

白井道雄　標準応用化学講座1　物理化学　コロナ社＊

鎌田　仁　同　4−5分析化学　同＊

青野武雄　同　15　改訂電気化学　同＊

竹内均他　地球の化学　日本放送出版協会＊

竹内均他　地球の歴史　同＊

野田春彦　生命の起源　同＊

大島正光　宇宙と人間　同＊

今西錦司　人間社会の形成　同＊

村田全他　数学の理想　同＊

千葉康則　脳　同＊

竹内龍一　音　同＊

菊地　誠　半導体の話　同＊

川口正昭　素粒子を探る　同＊

小尾信弥　太陽系の科学　同＊

白藤美隆　情動の医学　同＊

柳沢文他　食品衛生の考え方　同＊

竹内　均　続　地球の科学　同＊

早川正己　地熱　同＊

吉郷晋浩　アレルギーの話　同＊

矢野健太郎
幾何学の歴史　同＊

駒林　誠　気象の科学　同＊

久保寺章　火山の科学　同＊

丸山工作　生命の物質　同＊

高橋浩一郎
災害の科学　同＊

阿部友三郎
海水の化学　同 ※

竹内　均　続　地球の歴史　同 ※

田多井吉之助
健康のすべて　講談社 ※

アルフレッド・レニイ
数学についての三つの対話
農談社 ※

吉田順五　ＮＨＫブックス136　雪の科学
日本放送出版協会※

日本分析化学会編
分析化学大系　周期表と分析化学
丸　善

横畑　勇　水文学講座３　水の循環　共立出版

菅原正己　同　７　流出解析法　同

生態学講座10　土壌動物生態学
35－ａ　生態系の保護と管理１　同

地球化学　環境問題特別号　1975
地球化学討論準備委員会

畑田　博　おはなし天文学　１．２．３．地人書館※

清水幾太郎編　新天文学講座13　天体の位置観測
恒星社 ※

下保　茂　天体写真講座１　天体写真の基本
地人書館※

香西洋樹　同　２　天体写真の写し方
泉　茂　同　３　天体写真のＤＰＥ
同　同　４　天体写真の応用と工作
同 ※

R.S. バーリントン他
確率統計ハンドブック　森北出版

飛田武幸　ブラウン運動　岩波書店

日本化学会編
新実験化学講座１　基礎操作１
丸　善

A.ペリー　一万年後　上　宇宙に移住する人類
同　下　惑星を改造する科学
光文社 ※

佐藤達夫　私の植物図鑑　実業書院※

新数表シリーズ23　複素双曲線函数表
コロナ社※

小槻孝二郎他
流星とその観測　恒星社 ※

宮本正太郎他
目で見る天体ブックス　月をひらく
地人書院※

藤井　旭　透視版　星座アルバム　誠文堂新光社※

Ｓカーリン
数理解析とその周辺３　確率過程講義

渡辺信三　同　９　確率微分方程式
産業図書

宮本正太郎
ブルーバックスＢ273　惑星と生命
講談社 ※

崎川範行　同　Ｂ274　改訂新版
科学の手帖　同 ※

宇賀多義昌
数学ライブラリー39　実験計画法
森北出版

竹内　啓　数理統計学　東洋経済新報社

近藤次郎　統計学のための数学入門　同

井上真由美
応用微生物概論　日刊工業

井口昭洋他
プロセス物理化学　同

蛭尾学他　解説　高分子物理化学　同

磯部邦夫　実験計画法入門　条件の決め方　同
同　解析の手順　同

小西省三　例題演習　実験計画法　同

梶山正登　新版　物理学概論　上　下　同

服部俊他　無機高分子　同

光延旺洋　有機化学　同

井口晴弘　多変量解析とコンピュータ　プログラム
同

ＪＥスミス編
トレーキャニオン号海難による海洋汚染と
生物環境　日高海洋科学振興財団

長谷田泰一郎
低温　河出書房※

Rotman　The Theory of Groups Allyn & Bacon

Malliavin　Geometrie differentielle intrinsegue
Hermann

Anderberg　Cluster Analysis for Applications
Academic Press

Anderson　An Introduction to Multivariate
Statistical Analysis　Wiley

Mardia　Statistics of Directional Date
Academic Press

Milnor　Topology from the Differentiable view
Point　Virginia

Bellman　Applied Dynamic Programming
Princeton

Frey　Regional Forecasting　Archon Books

Arfken　Mathematical Methods for Physicists
Academic Press

Wilansky　Topics in Functional Analysis
Springer

Robertson　Topological Vector Spaces
Cambridge Univ. Press

McDonald　Finite Rings with Identity
Marcel Dekker

Silverman　Elementary Furctional Analysis
M.I.T.Press

Sze-Tsen Hu
Homotopy Theory　Academic Press

Bochner　Fourier Transforms　Kraut

Mathematical Theory of Dislocations
A.S.M.E

Sagle　Introduction to Lie Groups and Lie
Algebra　Academic Press

Jacobson　Lectures in Abstract Algebra
Van Nostrand Reinhold

Titchmarsh
Introduction to the Theory of Fourier
Integrals　Oxford

Bronshtein
A Guide Book to Mathematics
Springer

工学技術

日本機械学会講演論文集750―11～19
日本機械学会

建設要覧　産業技術会議

R.L.カルプ他
廃水の高度浄化法　公害対策技術同友会※

国際環境問題研究会
和英公害・環境用語集　同 ※

森政弘他　ロボット　日本放送出版協会※

高田恭行他
都市の生活空間　同 ※

平井　聖　日本住宅の歴史　同 ※
JISハンドブック　機械要素　1975
日本規格協会

中川元他　新選材料試験方法　養賢堂

ティモシェンコ
材料力学史　鹿島出版会

P.J.E.　金属疲労の基礎　養賢堂

佐藤泰夫　Fortran 文法とプログラミング
東京大学出版会

吉江清他　電気応用　電気学会

電力設備現場試験マニュアル　電気書院

高山信雄　現場技術者のためのTRラジオの原理と調
整・修理　啓学出版

Codasyl システムズ委員会
データベースシステム　共立出版

システムダイナミックス　同

西村恕彦　JIS情報処理用語解説　同

島川正憲　超音波工学　理論と実際　工業調査会

山口静也他
詳解電気回路例題演習2.3　コロナ社

土木学会　編　1972～1973,1973～1974＊　土木学会

合田　健　水質工学　基礎編（2冊）　丸　善

シュレボフ
　　炭素高鉛材料の物性　日ソ通信社

トランジスタ技術編集部
　　最新トランジスタ互換表'75　CQ社

峰川純行　便覧危険物有害物質公害物質　共立出版＊

日本化学会訳編
　　実験室廃棄物処理指針　丸　善　＊

石橋弘毅　環境用語集　共立出版＊

福本　勲　産業都市放射性廃棄物処理技術　同　＊

友野理平　公害用語辞典　南江堂　＊

MOL編集部
　　公害防止管理者試験突破テキスト　水質編
　　大気編　オーム社＊

足立勇寛他
　　環境アセスメント手法入門　同　＊

ロングモア
　　現代のテクノロジー9　医療と機械
　　河出書房＊

尾島俊雄　暗くなる大都市　日本放送出版協会＊

高橋　清　半導体工学　森北出版＊

化学工学協会
　　化学装置便覧（3冊）　丸　善　＊

斎藤　勇　圧力容器構造規格による計算例集（5冊）
　　産業図書＊

中村浩他　プロセス設計プログラミング入門（2冊）
　　日刊工業新聞社＊

桑田敬治　化学のためのプログラミング　培風館　＊

日本粉体工業協会
　　造粒便覧　オーム社＊

青島賢司　安全管理者のための安全教育学　同　＊

化学工学協会
　　ケミカルエンジニア　東京化学同人＊

日本化学会訳編
　　環境浄化の化学　丸　善　＊

　同　環境科学と技術の進歩1,2　同　＊

　同　生物圏資源の利用と保全　同　＊

　同　環境質の指標　同　＊

　同　人間活動と生態系の破綻　同　＊

石橋多門　飲み水の危機　東京文学出版会＊

森口繁一　電子頭脳　日本放送出版協会＊

関　英男　エレクトロンの話　同　＊

井戸　剛　SSTの科学　同　＊

末永一男　安全運転の科学　同　＊

垣賀雅夫他
　　システム工学とは何か　同　＊

斎藤晴男　新しい電池の話　同　＊

井戸　剛　人間－機械系の話　同　＊

幸田成孝他
　　金属の電子顕微鏡写真と解説（2冊）
　　丸　善

宮崎和美　技術ディスカッションの英語表現
　　地人書館

宮田　浚　電子物性演習　工学図書

安全工学協会
　　安全工学便覧　コロナ社

化学工学協会
　　プラントの安全と公害対策　丸　善

原田千三　埋設管設計法　森北出版

吉川和広　最新土木計画学　同

東京都下水道研究会
　　下水道管渠施工ハンドブック　山海堂

ザルバ他　地すべりとその対策　鹿島出版会

ラウス他　水理学史　同

建設省　流域別下水道整備総合計画調査　指針と解説
　　日本下水道協会

松尾新一郎他
　　地下水位低下工法　鹿島出版会

武田健策他
　　水路トンネルの設計施工　山海堂

横山長之　環境アセスメント手法入門　オーム社

安達公一他
　　電子顕微鏡利用の基礎　共立出版

　　最新粉粒体プロセス技術集成
　　産業技術センター＊

粉体工学研究会
　　粉体物性図説　同　＊

科学技術庁
　　テクノロジーアセスメント
　　科学技術広報財団＊

　　電気四学会連合大会講演論文集　昭和50年
　　電気学会

　　1975年度（第11回）水工学に関する夏期研修会講演集　Aコース　Bコース
　　土木学会

M.Taub　パルス，ディジタルスイッチ回路　上　中　下
　　近代科学社

伝田精一　入門セミナー　CQ出版

堀部延春　機械製図　理論と実際　工学図書

伊藤貴康　プログラム理論　コロナ社

大久保正夫他
　　機械製図法　朝倉書店

大西　清　JISによる機械製作図の読み方
　　描き方　オーム社

ソニ，テクロトニクス
　　波形観測　オシロスコープ　テクニック
　　ガイド　ラジオ技術社

ティモシェンコ
　　材料力学史　鹿島出版会

土木学会　土木工学ハンドブック　上　中　下
　　資料編　技報堂

西村　純　気流をとばす　岩波書店＊

加藤龍夫　大気汚染のガスクロマトグラフ技術
　　三共出版

沼田　真　環境科学の方法と体系
　　環境情報科学センター

鈴木栄一　環境統計学　同

角野晃二　応用数学　コロナ社

小野満雄　増補　エネルギー概論　日本評論社

吉浜庄一　自動車エンジンのトライボロジー
　　ナ[illegible]社

阿部博之　機械工学のためのコンピューターの応用
　　森北出版

渡辺茂他　システム工学とは何か　日本放送出版協会

高橋希一　テクノロジーアセスメント入門
　　竹内書店

山口柏樹　弾塑性力学　森北出版

藤田譲他　材料力学演習2　培風館

日本アイソトープ協会
　　改訂3版　ラジオ，アイソトープ　丸　善

土木学会誌編集委員会
　　土木技術者のための法律講座　土木学会

忍滑谷良一
　　下水道講座2　管渠の設計と考え方
　　鹿島出版社

日本地域開発センター
　　民間ディベロッパー　同

アメリカ市町村協会
　　都市交通計画の立て方　同

マイヤー他
　　都市交通の分析　同

益田義治　入門光弾性実験　日刊工業＊

牧野　昇　超技術産業への挑戦　同　＊

河野徳吉　ISOUNESCO規準による技術
　　レポートの書き方（2冊）　同　＊

通商産業省
　　昭和60年の自動車産業　同　＊

大野良太他
　　公害防止の管理と実務　大気編　同　＊

中野有明他　同　騒音編　同 ＊

小泉睦男他　同　産業廃棄物編　同 ＊

木内　石　機械設計便覧　同 ＊

仙波正荘　歯車の誤差と強さ　同 ＊

ポンプ設計計画データ集　同 ＊

折田豊明　純度体素子入門　同 ＊

山岸正雄　ＮＣ工作機械　同 ＊

鋳物技術講座６　鋳物設計　同 ＊

中山正和　技術者の創造性開発と訓練　同 ＊

大仲壌義　特許のとり方　同 ＊

石塚未豊他

技能と訓練　塗装技術　同 ＊

岡本明他　工業廃水と廃水処理　同 ＊

呂　成辰　金属の化学　同 ＊

井本　稔　高分子工学概論　同 ＊

同　高分子の構造　同

井本立雄　反応工学　同

R.L.Augustine

ファインケミカルにおける水素化反応

同 ＊

平田光穂　最新蒸留工学　同 ＊

山崎文男　放射線取扱いの基礎知識　同 ＊

中川　洋　真空蒸留　同 ＊

中村一男　真空工業概論　同 ＊

日本接着協会

接着ハンドブック　同 ＊

キャッツ　テクニカル　スケッチング　同 ＊

河田幸三他

光弾性実験法　同 ＊

中野機雄　実用産業英語　同 ＊

高原康彦　システム工学の理論　同 ＊

猿橋勝他　テクノロジーアセスメントの進め方

（２冊）　同 ＊

塚本修巳他

電気制御の基礎　同 ＊

二木久夫　サーミスタとその応用　同 ＊

岩山愛介　電子物性と半導体素子　同 ＊

相川浩他　ＳＣＲとその応用　同 ＊

宮入庄太　サイリス応用ハンドブック　同 ＊

垂井康夫　ＭＯＳ電界効果トランジスの応用　同 ＊

石野寛他　半導体素子　ＩＣの測定法　同 ＊

上之園親佐

超高圧送電　同 ＊

小林駿介　液晶　同 ＊

星野道夫　電子計算機概論　同 ＊

原明弘他　プロセスのシーケンス自動制御　同 ＊

ＥＰＤ用語研究会

図解　電子計算機用語辞典　同 ＊

飯島泰蔵　パターン認識　同 ＊

寺田寿郎他

システム工学講座１　システム理論

同 ＊

同　同　２　システム工学手法

同 ＊

関根泰次　同　７　電力システム

同 ＊

伊藤光江他　同　８　交通システム

同 ＊

石原舜介　同　10　都市社会システム

同 ＊

公害防止ハンドブック編集委員会

図説　公害防止ハンドバック　同 ＊

南部鉄一　公害防止の管理と実務　水質編

三村浩史　都市を住みよく出来るか　同 ＊

公害研究会

新版　公害用語辞典　同 ＊

宇津橋昭八郎他

施工技術者のためのネットワークプラニング

同 ＊

長崎作治　海洋土木　同 ＊

田村進夫　電子回路　同 ＊

小林春洋　レーザ応用技術　同 ＊

安東　温　レーザ応用計測　同 ＊

二反田鶴松

技術英語入門　同 ＊

井上修次郎

わたしは合成紙　同 ＊

新保正樹　高分子材料　同 ＊

六浜義和　有機工業化学　同 ＊

通商産業省

日本のエネルギー問題　同 ＊

Bolton　Sewage Treatment　Butterworths

Zienkiewicz

The Finite Elemente Method in Engineering Science　McGraw-Hill

E.N.Sharp Simple machine and hew They work

Random House

AS.Kobayashi Exqerimental Techigue in Fracture Mechanics　Iowa State U.Press

Internoise

アブストラクト

インターノイズ75出版委員会

産　業

農林統計協会編

食料需要表　昭和48年度　農林統計協会

藤井清光　海洋開発　東京大学出版会＊

G.エクボ　景観論　鹿島出版会

八幡敏雄　土壌の物理　東大出版会

島津康夫　国土科学　日本放送出版協会＊

中西武夫　改訂新版　畜産物利用学　朝倉書店

芸　術

ジョンアー　戯曲作法

未来社　＊

オマリー　現代野球百科

ベースボールマガジン社＊

ノウスト，ノーゴワ

演出家の仕事（２冊）　理論社　＊

大系世界の美術９　東方キリスト教美術

学研社

安井曾太郎素描集　1904－1910

日動出版部

写真技術便覧編集委員会編

改訂　写真技術便覧　コロナ社

栄久庵憲司

インダストリアルデザイン

日本放送出版協会＊

川崎降章　安全登山学への道　同 ＊

故宮博物院　講談社

新修日本絵巻物全集２　源氏物語絵巻

角川書店＊

野尻抱影　星と東方美術　恒星社　＊

ちろかわ劇作会

学校サークル演劇　一幕物脚本集４

青蛙書房＊

ジョンアーヴィン

戯曲作法　未来社　＊

語　学

松本道弘　考える英語　垂直思考から水平思考へ

朝日出版社

同　Give Get　発想から学ぶ英語　同

ユージン，Eランディ
アメリア俗語辞典　研究社

矢吹勝二　日本文化の英会話　（2冊）　研究社　※

大井上滋他
米会話　リダクションの演習　語　研　※

松居司他　英会話世界の旅　1　2　3　研究社　※

水野潤一　英語日本史の旅　（2冊）　同　※

トミー植松
英語1分スピーチ　ジャパンタイムズ※

田崎清忠
海外旅行　英会話の公式　正編　同　※
同
続海外旅行　同　※

須賀照雄他
3　ステップ　ヒヤリングの入門
1－4　語　研　※

日本国語大辞典　ひちーほいん　（2冊）
同　ほうーみん　（1）
小学館

トミー植松
続々こんな時英語でどういうか　評論社

山田　琢　新訳漢文大系50　曇子　上　明治書院※

西尾実他　岩波国語大辞典　第2版　岩波書店

三省堂編修所　三省堂
用字用語必携　中型版

長谷川潔　英語がわかる秘訣　国際コミュニケーションズ

松本道弘　知的対決の論理　朝日出版社

関口存男　初等ドイツ語講座　中巻　三修社　※

Susie Fown
米会話エクスプレッションの演習　上　下
語　研※

P.Pimleur
Encounters　Harcourt Brace

Langenscheidts New College German Dictionary　German—English English—German　Langenscheidt

鈴木孝夫　閉ざされた言語　日本語の世界
新潮社　※

文　学

福田清人他
人と作品
1　太宰治　清水書院※
2　正岡子規　同　※
3　夏目漱石　同　※
4　佐藤春雄　同　※
5　石川啄木　同　※
6　堀　辰夫　同　※
7　芥川龍之介　同　※
8　島崎藤村　同　※
9　樋口一葉　同　※
10　高村光太郎　同　※
11　森　鷗外　同　※
12　谷崎潤一郎　同　※
13　高浜虚子　同　※
14　宮沢賢治　同　※
15　林芙美子　同　※
16　国木田独歩　同　※
17　有島武郎　同　※
18　二葉亭四迷　同　※
19　泉　鏡花　同　※
20　川端康成　同　※
21　与謝野晶子　同　※
22　北原白秋　同　※
23　室生犀星　同　※
24　正宗白鳥　同　※
25　萩原朔太郎　同　※
26　岸田国士　同　※
27　岡本かの子　同　※
28　横光利一　同　※
29　斉藤茂吉　同　※
30　志賀直哉　同　※
31　高見　順　同　※
32　菊地　寛　同　※
33　島木健作　同　※
34　山本有三　同　※
35　徳富蘆花　同　※
36　武者小路実篤　同　※
37　坪内逍遙　同　※
38　田山花袋　同　※
別冊　文学散歩　同　※

安岡章太郎
現代作家と文章　三省堂　※

大岡　信　現代詩人論　角川書店※

伊藤　整　知恵の木の実　文芸春秋※

山崎正和　劇的なる日本人　新潮社　※

渋谷国忠　萩原朔太郎論　思潮社　※

岡田　啓　島尾敏雄　国文社　※

鏡花全集　22－23　岩波書店※

有吉佐和子
複合汚染　上　下　新潮社

高橋英夫　役割としての神　同

石川忠久　漢詩の世界，その心と味わい　大修館書店

松浦直己　形象と変容　詩人は何を見たか
科学情報社

ティリーズ
英詩とその背景　南雲社

長沢順治　現代英詩人論　北星堂

原　一郎　バラッド研究序説　南雲堂

シエクスピアのソネット　文　理

シューメイカ
言語　神話　文学　同

スペンサー
妖精の女王　同

澤潟久孝　萬葉集注釈　1　16－19　中央公論社※

鑑賞日本古典文学　第10巻　王朝日記
角川書店※

T.Hardy　Under the Greenwood Tree　Macmillan

Blunden　Thomas Hardy　同

T.Hardy　The Mayor of Casterbridge　同

同　The Trumpet Major　同

J.Melauchlan
Conrad Nastromo　Arnold

S.Aynes　Twentieth Century Interpretations of 1984　Prentice-Holl

P.Bultenhuis
Twentieth Century Interpretations of the Portrait of a lady　同

J.Korg　Twentieth Century Interpretations of Bleak House　同

P.Collins　Dickens　Macmillan

A.Huxley　Adonis & the Alphabet
Chatto & Windus

A.E.Dyson　Dickens　Papermac

L.Brander　Aldous Huxley　Hart-Davis

S.Sanders　D.H.Laurence　Vision

R.upRoberts
Trollope Artist and Moralist
Chatto & Windus

D.Skilton　Anthony Trollope and his Comtemporary
Longman

R.B.Partlow
Dickens the Craftsman
South Illinois University Press

A.Huxley　Crome Yellow　Chatto & Windus

同　Brave New World　同

J.I.M.Stewart
Thomas Hardy　Allen Lane

筑摩文学大系8　唐宋詩集　筑摩書房※
明治文学全集88　明治宗教文学集(2)
同　※

木俣　修　万葉集　日本放送出版協会※

本田義憲　日本人の無常観　同　※

富倉徳次郎
平家物語　同　※

筑摩世界文学大系87　名作集　(2)
筑摩書房※
明治文学全集61　明治詩人集　(2)　同　※

鏡花全集　23－24　岩波書店※

前野直彬　中国文学史　東京大学出版会

鑑賞古典文学19　平家物語　角川書店※